

警察庁は2月15日、2017年1年間起きた75歳以上の高齢ドライバーの死亡事故は、前年比41件減少の418件だったと発表した。

記録の残る1990年以降、減少数は最も多かった。

昨年3月に認知症対策を強化した改正道路交通法が施行され、免許返納が増えるなどしたとみられる。

75歳以上の死亡事故は過去10年、400件台で推移している。2012年以降は450件を超えていた。

昨年の死亡事故全体に占める75歳以上の割合は12.9%で、過去最多だった2016年から0.6ポイント減少した。10万人当たりの死亡事故は7.7件で、75歳未満(3.7件)の2倍以上だった。

ガードレールなどへの衝突が88件で最も多く、車同士の出会い頭の衝突が次いで67件だった。原因別では、ハンドル操作やブレーキとアクセルの踏み間違いなど操作ミスが130件で最も多かった。

死亡事故を起こした人の認知機能検査結果は、認知症のおそれ(第一分類)が7%、認知機能低下のおそれ(第二分類)が42%だった。認知機能の低下が事故に関係していることが浮かび上がった。

(2018.02.05)